

医者いらずの健康法

スポーツを文化レベルに



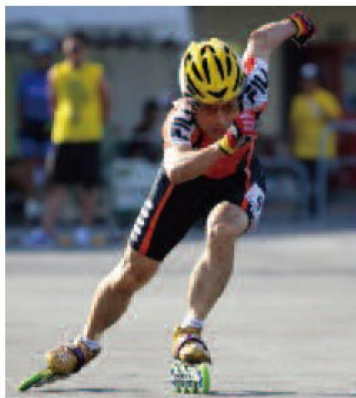
ばんどう ひろし
板東 浩氏

糖尿病専門医、ピアニスト、スピードスケーター、マスターズ陸上選手、著書として「肥満脱出大作戦」「糖質制限の実践法」など。印刷物は1500点以上。

7月上旬、サッカー日本女子代表・なでしこジャパンが活躍した。その中で、未来を背負う宮間あや主将が「サッカーをブームではなく文化に」と深いメッセージを。日本では種々のスポーツが趣味から文化へと進化中。今回は、この話題を考えてみたい。

■マラソンが文化に

日本のお家芸マラソン復活か？ 7月中旬、夏季ユニバーシアード光州大会の陸上男子ハーフマラソンで表彰台を独占。東京五輪も楽しみだ。皇居周囲ではランナーが増え、ロッカーとシャワーを備えたランニングステーションが増加してきた。全国のマラソン大会には申込みが殺到し、エントリーも簡単ではない。すでに老若男女誰もが走る文化が広がっているようだ。



■スケートも文化だ！

今回紹介したいのがインラインスケートである。私は35歳から20年以上滑走しており、私の人生の一部ともいえよう(図1)。

ハワイでは警察官がスケート靴を履いてパトロールをし、ニューヨーク・セントラルパークではインラインスケート軍団が集まってくる。フィートネスが生活に融合し、文化の一部と考えられる。



■恵那スケート場

岐阜市には「高橋尚子ロード」と命名された川沿いの綺麗なコースがあり、国際インラインスケート大会が開催されてきた。この流れで恵那市に「岐阜県クリスタルパーク

恵那スケート場」が完成(図2)。夏はインラインスケートやフットサル、冬は一周400mのアイスリンクに変貌する。日本で最も西に存在し、すでに冬期国体も開催された。

実は、本複合施設の完成にはスケート愛好者が行政を動かしてスケート文化を開花させた歴史が。7月下旬には全国民インラインスケート大会があり、1000〜5000mで熱戦が繰り広げられた(図3)。今後各競技で、若い世代とマスターズ選手によるスポーツ文化の発展を期待したい。

